

## 万葉集の「時」

桑川光樹

『万葉集』には、時（時・等伎・登吉など）ということばの用例が230か所ほど（正確には後に述べる）に見出されるが、それらはそれぞれ、どのような意味や働きを持ち、どのような時間意識を反映しているであろうか。本稿は、まず基礎資料としてその全例を一覧表に示し、ついで発想分析の立場から問題の所在を指摘しようとするものである。

### 一、用例

用例の採集は『総索引』に依ったが、同索引に洩れている一例（411登吉）、および別訓（トキドキ・ヨリヨリ）によって採られている一例（2457）を補入した。巻一〇2033の「磨」はトキと読み得るかどうかに疑問があり、番外とすべきであったが、一応、総索引に従って例に加えた。ただし、実質的な考察の対象とはしなかった。また、巻二191の歌の「春冬」をトキと読む説があるが、これも定訓としたいので考察の対象とせず、番外として扱った。実質的には結局229例を資料としたことになる。

これらの用例を『作者類別年代順萬葉集』の記載順序にしたがって類別したのが左に掲げる表である。

「用例番号」は、本稿の便宜のために付した通し番号であり、本稿で「第〇例歌」のように言うのはこの番号のことである。

「長歌」欄その他小区画の部分では、該当のところを〇印で示した。「恋」は、その歌が恋愛歌ないしそれに類するもの・それに関係の深いものである場合を示す。七夕歌は恋愛譚としての面を重視した。

「本文」は古典文学大系本の訓に従った。

「構造」は、歌中の「時」ということばが、修飾語を冠されているか・いないか、文の主語になっているか・いないか、などを見るために設けた欄である。「内側の主語・述語」というのは（以下しばらく英文法の用語を援用するが）、「時」が関係副詞であるような場合にその複文の従属節にふくまれる主語や述語のことである。ただし、単純な形容詞もこの欄に記入した。「外側」というのは主文であり、「時」を包む文脈的環境である。

「時なし」以下の細目については後に詳述する。

用例番号	巻	歌番号	長歌	部立	恋	作者	本文	大意					備考		
								内容	内容(和歌)	時	時の経過	内容(和歌)			
1	1	14	雑			天智天皇	西粟山と西粟山とあひし時立ちて見て来し如南国乘	西粟山と西粟山とあひし	あひし	時	ニ				
2	2	150	挽			婦人(菅原時)	衣ならば脱く時もなくわか恋ふる身そ時のた...	衣ならば	脱く	時	も	な	わか恋ふる	0	
3	1	25	雑			天武天皇	み吉野の具伐の楯に時なくと雪は降りける			時		な	雪は降りける	0	
4	4	0	雑				その雪の時なきが如 雨の雨の雨なきが如	その雪の		時	も	な		0	
5	2	159	挽			持統天皇	冠袴の衣の袖は乾ら時をもなし	衣の袖は	乾ら	時	も	な		0	
6	7	1260	雑			古歌集	時にくに班の衣着流しきか鷹の標乗時にあらねども	標乗		時	ニ	あら		0	
7	2	167	挽			和歌入麻呂	天地の初の時 ひどかたの天の河原に	天地の	初の時	時	ニ			0	
8	4	0	雑				神楽ひ舞ひて 神分り分りし時に	神		時	ニ			0	
9	1	49	雑				日並皇子の命の馬並めて 阿蘇山に立し時は来向ひ	日並皇子	御駕立し	時	は	来向ひ		0	
10	2	199	挽				万代に然しもあらむと 木綿花の栄ゆる時に			時	ニ			0	
11	2	196	挽				うつせぬと思ひし時 春は花折りのさし			時	ニ			0	
12	2	210	挽				うつせぬと思ひし時に 春は花折りのさし			時	ニ			0	
13	2	213	挽				うつせぬと思ひし時に 春は花折りのさし			時	ニ			0	
14	2	217	挽				思ひ恋ひらむ 時ならす 過ぎにし子らが			時	ニ	なら		0	
15	4	501	相				本通女等か 袖布留山の瑞垣の久しき時ゆ思ひまわれは			時	ゆ	思ひまわれは		0	
16	7	1286	雑			人麻呂歌集	山城の久世の社皇太子ありわか時と立ち栄ゆと事なすありそ			時	と	立ち栄ゆと		0	
17	9	1703	雑				雲隠り雁鳴く時は秋山の黄葉片待つ時は過ぐれど			時	ニ	過ぐれど		0	
18	4	0	雑							時	は	過ぐれど		0	
19	9	1705	雑				冬ごもり春を恋ひて植えし木の葉にむる時を片待つかれは	植えし木の	葉にむる	時	を			0	
20	10	2005	雑				天地と別れし時ゆ已妻は然を年にある秋待つわれは	天地と	別れし	時	ゆ			0	
21	10	2013	雑				天の河水陸草の秋風になむくを見れば時を果にけり			時	は	果にけり		0	
22	10	2028	雑				君に逢はず久しき時ゆ續る服の白袴衣垢づくまで			時	ゆ	續る服の		0	
23	11	2373	雑				何時はしと思ひぬ時とはあねどもわかたてて思はぬ			時	と	あ		0	
24	11	2415	雑				少女を袖布留山の瑞垣の久しき時ゆ思ひわれは			時	ゆ	われは思ひわれは		0	
25	11	2446	雑				白玉を纏きて持ちたり今よりはわか玉にせむしれる時たに			時	た	わか玉にせむし		0	
26	11	2508	問答				豊祖の神の御門を履ぬと侍従が時に逢へる思ひも			時	に	逢へる思ひも		0	
27	12	2852	寄物陳思				人言の繋がる時は香妹子に衣にありせば下に着ましを	人言の	繋がる	時	ニ			0	
28	2	177	挽			日並皇子舎人	朝日照る佐太の岡辺に 群れ居るつらか水波止むも時を無し			時	も	無し		0	
29	2	178	挽				双立たしの鳥を見る時に ぼたつみ流るる涙止めのよぬつる			時	ニ			0	
30	2	140	相			依羅娘	な思ひと思はるる時 ぼたつみ流るる涙止めのよぬつる			時	ニ			0	
31	13	3244	雑			不明	阿曾の海の荒磯の上のささげ波わか恋ひあはれは止む時をなし			時	も	なし		0	
32	13	3260	相				栲植の久しき時ゆ恋すればわか帯縁が願うごとく			時	も	なし		0	
33	13	3262	相				玉響懸けぬ時なくわか思へる君に依りては...			時	中			0	
34	13	3286	相				古の神の時より逢ひつる心も常忘れえず			時	より			0	
35	13	3290	相							時	より			0	

36	13	3297	0	相	0	〃	玉舞 懸けぬ時無くわが思ふ妹に逢はば													
37	13	3324	0	境	0	〃	万葉に斯くしもかども大船のたのめる時に													
38	13	3329	0	境	0	〃	何時はしも恋ひぬ時とはあらねどもこの九月を													
39	14	3352				〃	宿懐なる須賀の鹿野にはどぞ手鳴く声聞けは時ぞにかり													
40	14	3355		相	0	〃	天の原富士の紫山木の暗の時移りなほ逢はずかもあらむ													
41	14	3379		相	0	〃	わが背子を何ぞかと思はむ武蔵野のうつらむ花の晴風さものを													
42	14	3422		相	0	〃	待香深風吹日吹かぬ日ありといはば吾が恋のみし晴風かりかり													
43	14	3493	廣	相	0	〃	遅遅も君をし待たむ向つ楸の枝の川枝の時は過ぐども													
44	14	3572		譬喩	0	〃	何ぞ思へか阿賀山山木の中へ向つ時を思ひあすかも													
45	11	2457		寄物陳思	0	〃	大野うらへ小南風よりく木のふ下へ時と寄り来ぬわが思ふ人													
46	11	2606		正述心緒	0	〃	人目多敷艶新くぬれ髪はばいつれの時かわが思ひぞらむ													
47	11	2612		正述心緒	0	〃	白袴の袖に触れてよわが背子にわが恋ひるくは止む時ぞなし													
48	11	2626		寄物陳思	0	〃	古衣打束る人は秋風の立ち来る時にもの思ふものぞ													
49	11	2633		寄物陳思	0	〃	屢々鏡手に取り持て朝な朝な見せ時さへや恋の繋ぐむ													
50	11	2641		寄物陳思	0	〃	時守の打ち鳴り鼓を数み見れば時ははひりぬ逢はばむ怪し													
51	11	2645		寄物陳思	0	〃	宮村行く泉の淵に立つ長の思ひ時無く恋ひわたるかも													
52	11	2704		寄物陳思	0	〃	あひさしの山下響みゆへ水の時とさなくも恋ひ渡るかも													
53	11	2741		寄物陳思	0	〃	大海に立つらむ波は間のあらしに思ひくく止む時無し													
54	11	2775		寄物陳思	0	〃	山高か谷辺にはほ玉鳥絶ゆる時なく見むよしむかも													
55	11	2785		寄物陳思	0	〃	咲く花は思ふる時あれたわが恋ある心のうちは止む時もなし													
56					〃	〃														
57	11	2815		問答	0	〃	ま日長く夢にも見えす絶えぬともわが片恋は止む時もあらじ													
58	11	2823		問答	0	〃	かへりに君こそされに矜顔の白波流るる時も無き													
59	11	2836		譬喩	0	〃	三鳥言いまに苗はれ時待たば着すやなりなむ三鳥言迄													
60	12	2878		正述心緒	0	〃	ぬばたまの寝ての夕の物思に留りにし胸は思ひ時もなし													
61	12	2897		正述心緒	0	〃	如何ならむ日の時にかも吾妹子が裳引の浮輪に目に思ひ													
62	12	2916		正述心緒	0	〃	玉かろき逢はむといひは誰なるか逢へる時さへ面隠しする													
63	12	2921		正述心緒	0	〃	手研女は同じ情に懸しくも止む時も無く思へども思ふ													
64	12	2949		正述心緒	0	〃	うたへ果に心いびせし事計よくせわが背子逢へる時だに													
65	12	2954		正述心緒	0	〃	今よりは逢はばせしむれわが衣手の轡を穿る時もなき													
66	12	2978		寄物陳思	0	〃	奥道見ませわが背子が形見持たらむ時逢はざりぬかも													
67	12	2990		寄物陳思	0	〃	少女のしが績麻の各打麻懸け縫む時無きに恋ひ渡るかも													
68	12	2994		寄物陳思	0	〃	玉かろき懸けぬ時無く恋ひぬれども何しかば逢ふ時も無き													
69					〃	〃														
70	12	3006		寄物陳思	0	〃	月夜よか門に出て立ち足占してゆく時さへや妹に逢はざらむ													
71	12	3030		寄物陳思	0	〃	思ひ出でて為方なき時は天雲の敷ても知らず恋ひつらぞ居る													
72	12	3036		寄物陳思	0	〃	思ひ出づる時は為方無か佐保山に立雨霧の消ぬべと思はゆ													
73	12	3045		寄物陳思	0	〃	朝霜の消ぬべのくみや時無きに思ひ渡らむ思の緒にして													
74	12	3081		寄物陳思	0	〃	玉の緒を片緒に縫ひて緒を弱みゆるる時に恋ひすあかめやも													
75	12	3088		寄物陳思	0	〃	恋天邊赤霞の山に晴く鳥の間無く時無くわが恋ひいらくは													

万葉集の「時」

76	12	3139	獨旅	0	、	、	玉様の道に出で立ち別れ来し日より思ふに忘るる時無し	無し	0					
77	12	3168	獨旅	0	、	、	衣半の蓑若の浦の真砂子地間無く時無しわが恋かぐは	無し	0					
78	12	3179	獨旅	0	、	、	留りに人を思ふに蜻蛉野に居る白雲の止む時も無し	無し	0					
79	12	3189	悲別	0	、	、	あひさの山は白雲に隠せども君を思はく止む時をなし	無し	0					
80	12	3196	悲別	0	、	、	春日野の茅草か来におくれ居て時々を無しわが恋かぐは	無し	0					
81	7	1311	管楽	0	、	、	椽の衣は人皆無無しといひし時より着欲しく思はゆ	無し	0					
82	7	1368	管楽	0	、	、	石盤の川野や秋津に立ち渡る雲にしもあれや時をし待たむ	無し	0					
83	7	1371	管楽	0	、	、	ひさかたの雨には雲ぬを消しくもわが衣半は千る時なきか	無し	0					
84	7	1396	管楽	0	、	、	紫の名高の浦の名古葉の破に繋ぐも時待つわれを	無し	0					
85	7	1402	管楽	0	、	、	ごとく取りば中より取りばむ羨より迎けあむ時にたぐへきものか	無し	0					
86	10	1823	香雅	0	、	、	朝井埴に米鳴く親鳥かたに居る恋もぬや時終へず思く	無し	0					
87	10	1854	香雅	0	、	、	薫の木は瓜の梅のうつらへは花の時片散けぬ	無し	0					
88	10	1855	香雅	0	、	、	桜花時は過ぎぬに居る人の恋の盛りと今し散るわが	無し	0					
89	10	1907	香相	0	、	、	斯ひあけは何か植えけむ山吹の止む時思ふ恋か思へば	無し	0					
90	10	1955	香雅	0	、	、	霞公馬鹿ふ時無し香痛種にせむ日比中鳴くつれ	無し	0					
91	10	1964	香雅	0	、	、	黙然もありむ時鳴かなむ晚鐘の思ひ時片鳴わつれ	無し	0					
92	、	、	、	0	、	、	、	、	0					
93	10	1969	香雅	0	、	、	わが渚前の花橋は散りにけり梅さ時に逢へる君かち	無し	0					
94	10	1980	香相	0	、	、	五月山花橋に霞公馬鹿の影に逢へる君かち	無し	0					
95	10	1982	香相	0	、	、	晩鐘は時に鳴けども片恋に手弱女われは時わかす泣く	無し	0					
96	、	、	、	0	、	、	、	、	0					
97	10	1994	香相	0	、	、	豊草の露分衣着けなぐにわが衣半の乾る時もなき	無し	0					
98	10	2033	香雅	0	、	、	天の河安の河原に定まりて神鏡香宮得無	無し	0					
99	10	2053	香雅	0	、	不明	天の河八十瀬霧らへり夢屋の時待つ船は今し漕ぐべし	無し	0					
100	10	2056	香雅	0	、	、	天の河打橋渡し妹か寒道止まず過はむ時待たずとも	無し	0					
101	10	2089	香雅	0	、	、	天地の初めの時ゆ	無し	0					
102	10	2092	香雅	0	、	、	天地と別れし時ゆ	無し	0					
103	、	、	、	0	、	、	、	、	0					
104	10	2093	香雅	0	、	、	あつた玉の月を繋ぎて妹に逢ふ時はいと立ち待つに	無し	0					
105	10	2106	香雅	0	、	、	妹に逢ふ時片待つとひさかたの天の河原に月を懸にける	無し	0					
106	10	2109	香雅	0	、	、	沙瀬田の野辺の秋萩時ほけり今盛りなりて袖願をむ	無し	0					
107	10	2117	香雅	0	、	、	わが渚前の萩の衣長し萩風の吹きなむ時に吹かむと思ひて	無し	0					
108	10	2131	香雅	0	、	、	いせの行相の早霜を刈る時に刈りも萩の花咲く	無し	0					
109	10	2170	香雅	0	、	、	と男鹿の妻どゝ時目に月を展み雀が音聞ゆ今し来りしち	無し	0					
110	10	2202	香雅	0	、	、	萩萩の枝もとを乞に露露遣き寒くも時はなりにけるかち	無し	0					
111	10	2209	香雅	0	、	、	萩萩の下の葉の葉葉花に綻ぎ時過ざりければ後恋ひわかも	無し	0					
112	10	2236	香雅	0	、	、	五櫓かけぬ時立ちわが恋は時雨に降うは濡れつつも行かぬ	無し	0					
113	10	2251	香相	0	、	、	橘を守部の屋の門田早稲刈る時過ぎぬ来れどすらしち	無し	0					
114	10	2341	香相	0	、	、	思の出づる時はあなむい豊国の木橋山雲の消えゆく思存ゆ	無し	0					
115	5	804	香雅	0	、	山口・徳良	手携りて遊びけむ 時の盛りを留めかね過し遣りつれ	無し	0					

116	8	1520	0	秋雅	0	・	・	春牛は織女と天地の別れし時ゆいづらう川に向き立ち	天地の	別れし	時	ゆ							
117	8	1526	0	秋雅	0	・	・	玉かざる髪鬘に見えて別れなほむさびや恋ひも遠かきまでは	天地の	透ひ	時	まは							
118	5	892	0	雑	0	・	・	此の時は何かにシツカ汝が世は渡る		此の	時	は							
119	5	793	0	雑	0	・	・	世の中は空しきものと知る時しよよまます悲しかりたり		知る	時	は							
120	3	439	0	雑	0	・	・	遠るべく時は成りたり辰時に継ぎ手本をわが枕の心		遠るべく	時	は							
121	6	961	0	雑	0	・	・	湯の泉に癒く戸隠はわがごとく妹に恋ひたり時わかす癒く		癒く	時	は							
122	5	810	0	雑	0	・	・	如何にあらむ日の時にかも声知りて人の膝の上をわが枕の心		如何にあらむ	時	は							
123	6	970	0	雑	0	・	・	指違の衆相の川野の萩の花散らむ時にし行きて手向けむ		散らむ	時	は							
124	4	526	0	相	0	・	・	千鳥橋く佐保の河津のさざれ波止む時も黒しわが恋ひくは		止む	時	は							
125	4	527	0	相	0	・	・	来むていひも来ぬ時あるを来むていひを来むては待たじ来ぬは		来ぬ	時	は							
126	8	1447	0	香雅	0	・	・	尋常に聞かば苦しき呼子馬子なつかしき時にほなりぬ		なつかしき	時	は							
127	8	1450	0	香相	0	・	・	情なきものにせありける香雅をなむく時に恋の繁きは		たなびく	時	は							
128	4	585	0	相	0	・	・	出で去む時しほありむを故に戀ひつらむてなぬべし		出で去む	時	は							
129	4	619	0	相	0	・	・	..大船のたのめる時にちほやぶる 神や離れむ		大船のたのめる	時	は							
130	4	661	0	相	0	・	・	恋ひ恋ひて遠へる時に愛しき言尽してよ長くと思はば		遠へる	時	は							
131	4	760	0	相	0	・	・	うち渡す竹田の乗に鳴く鶴の間無く時無しわが恋ひくは		見ぬ	時	は							
132	19	4221	0	境	0	・	・	かくは川恋ひくしあらは真流鏡見ぬ日時なくあらむを		見ぬ	時	は							
133	3	423	0	境	0	・	・	..九月の時雨の時ば黄葉を折りかざさむと		時雨の	時	は							
134	3	317	0	雑	0	・	・	天地の分れし時ゆ袖さびて高く貴き		分れし	時	は							
135	6	1005	0	雑	0	・	・	..この川離ればゆめさもしきの 大宮所 止む時もあつめ		止む	時	は							
136	4	573	0	相	0	・	・	ぬばたの黒髪変り白髪ても精き恋には会ひ時かりたり		会ひ	時	は							
137	6	914	0	雑	0	・	・	滝の上の三船の山は契かぞ思ひ応る時もも無し		思ひ応る	時	は							
138	6	915	0	雑	0	・	・	千鳥橋く吉野川の川音なす止む時無しに思はゆる島		止む	時	は							
139	6	929	0	雑	0	・	・	荒野に里はあれども大星の敷き坐す時は都となりぬ		敷き坐す	時	は							
140	8	1453	0	香相	0	・	・	玉輝 戀けぬ時無く思の緒にわが思ひは		戀けぬ	時	は							
141	4	579	0	相	0	・	・	見本にいまの時だに更らねば片月のほど思はゆる島		大星の	時	は							
142	3	441	0	境	0	・	・	大星の命恐ぬ大獲の時にはあつねど實かくります		大獲の	時	は							
143	3	443	0	境	0	・	・	..うせぬの情しきこの世を霞霧の置きて往にけむ時はあつね		存たむといひ	時	は							
144	15	3701	0	通新羅人	0	・	・	竹歌の黄葉を見れば香妹子が待たむといひし時を果にける		香妹子が	時	は							
145	17	3891	0	不香	0	・	・	荒津の海潮千瀬清ち時はあつていづれの時わか恋ひざらむ		荒津の	時	は							
146	・	・	0	不香	0	・	・	..霞霧に色づく時に		霞霧に色づく	時	は							
147	6	971	0	雑	0	・	・	..丹つツビの葉はむ時の		丹つツビの	時	は							
148	・	・	・	・	・	・	・	..牡丹花 咲きむ時に		牡丹花	時	は							
149	・	・	・	・	・	・	・	..牡丹花 咲きむ時に		咲きむ	時	は							
150	9	1740	0	雑	0	・	・	春の日の霞める時に		霞める	時	は							
151	9	1753	0	雑	0	・	・	..丹つツビの葉はむ時に		霞める	時	は							
152	9	1781	0	相	0	・	・	..行かぬの知らむ時と渡らぬの暮れ立つ波に船出すべし		知らぬ	時	は							
153	9	1807	0	境	0	・	・	..行かぬの知らむ時と渡らぬの暮れ立つ波に船出すべし		知らぬ	時	は							
154	9	1809	0	境	0	・	・	..八年児の片生の時ゆ川が髪に 髪たまくまで		片生の	時	は							
155	・	・	・	・	・	・	・	..見しかと想懐も時の		想懐も	時	は							



196	4	759	相	田村大嬢	いかならむ時に妹を種生のきたなき屋戸に入りませむ		いかならむ	時	に	か	妹を種生の..	0	
197	8	1551	叙雑	市 桑 王	時待ちてふりし時時の雨止めぬ明けを朝か山のちめたむ		わびをる	時	に	?	待ちて		
198	4	618	相	大神女郎	さ夜中に友呼ぶ千鳥もの思ふとわがをる時に鳴きつらむとよ		栄ゆる	時	に		鳴きつらむとよ	0	
199	6	996	雑	海大養圃唐	御民われ生ける験あり天地の栄ゆる時に遇へらく思へば		妹とありし	時	に	は	遇へらく思へば		
200	15	3591	遺物遺人	未 詳	妹とありし時ばあれども別れては衣手寒きものにそありける		又しき	時	を	過ぎにけるか	あれども		
201	15	3600	遺物遺人		離れに立てむもの木うたがたも久しき時を過ぎにけるかも		来る	時	と		妹が待つらむ		
202	15	3663	遺物遺人		わたつみの卯フ籠 海苔来る時と妹が待つらむ月経にける			時	と		待つと...		
203	15	3679	遺物遺人		大船に集積聚聚を時待つとわれは思へ月経を疑にける			時	と				
204	15	3688	遺物遺人		..時も過ぎ月経ぬれば今日か来む 明日か来むと			時	と		過ぎ"		
205	15	3713	遺物遺人		朝戸あけてもの思ふ時に白鷺の置ける秋萩風をツツもとよ		もの思ふ	時	に		白鷺の置ける..	0	
206	8	1579	叙雑	文 彦 兼	わが屋戸前の花桶に霍公鳥今こそ鳴かめ 友に逢へる時		友に逢へる	時	に			0	
207	8	1481	叙雑	大伴 善持	..秋さらば黄葉の時に春さらば花の盛り		黄葉の	時	に			0	
208	17	3993		大伴 池主	..月立たば時もかほさず 石竹花が花の盛り			時	と		かほさず"	0	
209	17	4008			..月立たば時もかほさず 石竹花が花の盛り			時	と		かほさず"	0	
210	4	703	相	巫師麻蘇姫子	わが背子を相見しその日今日までわが衣手は乾る時も無し		乾る	時	と		無し	0	
211	8	1492	叙雑	遊 行 女 婦	君水家の花桶は成りにつり 花なる時に逢はれしものを		花なる	時	に		逢はれしものを	0	
212	15	3749		身上 娘 子	他国に君をいませて何時までか吾が恋ひ居らむ時の知らなく			時	に		知らなく		
213	15	3770			あぢま野に宿れる星水沸り来む 時の迎へを何時とお待ちむ			時	の		何時とお待ちむ		
214	15	3774			わが背子が沸り来まざる時の為命残さむ 忘れたまひな		沸り来まざる	時	の		命残さむ	0	
215	15	3780		中 臣 宅 守	恋ひ死なば想ひも死ねばと霍公鳥物思ふ時に来鳴き響むる		物思ふ	時	に		来鳴き響むる	0	
216	15	3781			來にして物思ふ時に霍公鳥わが住む里に來鳴き響むる		物思ふ	時	に		霍公鳥..	0	
217	15	3782			雨徳り物思ふ時に霍公鳥わが住む里に來鳴き響むる		物思ふ	時	に		鳴くべきか	0	
218	15	3784			心なき鳥にそありける霍公鳥物思ふ時に鳴くべきものか		物思ふ	時	に		鳴くべきものか	0	
219	16	3885	有由縁雑	乞 食 者	..来鳴仕かゝる時にあしひきの この片山に		仕かゝる	時	に		あしひきの..	0	
220	4	4			..鹿待つとわが居る時に さを鹿の 来立ち嘆か		居る	時	に		さを鹿の..	0	
221	17	3951		秦 八 十 郎	晩蟬の鳴きぬる時は女郎花咲きたる野辺を行きつら見べし		鳴きぬる	時	に		女郎花..	0	
222	18	4035		田 辺 福 豊	霍公鳥いと瓜時なし 昔薄草髪にせむ日 此や鳴き渡れ		いと瓜い	時	に		なし	0	
223	18	4042			藤波の咲き行く見れば 霍公鳥鳴くべき時に近づきにつり		鳴くべき	時	に		近づきにつり	0	
224	6	1056	雑	福 豊 歌 集	をよめ 春が遺麻蘇くは 虎崎の山 時の往ければ 宗師となりぬ		懸けぬ	時	に		宗師となりぬ		
225	9	1792	相		.. 春が遺麻蘇くは 虎崎の山 時の往ければ 宗師となりぬ		懸けぬ	時	に		宗師となりぬ	0	
226	18	4053		久米 五 穂	木の暗にけりぬるものを 霍公鳥 何か来鳴かぬ 居に逢へる時		居に逢へる	時	に			0	
227	20	4301		安 宿 王	.. 春が遺麻蘇くは 虎崎の山 時の往ければ 宗師となりぬ		懸けぬ	時	に			0	
228	4	4			.. 春が遺麻蘇くは 虎崎の山 時の往ければ 宗師となりぬ		懸けぬ	時	に			0	
229	20	4382		大伴 朝 成	.. 春が遺麻蘇くは 虎崎の山 時の往ければ 宗師となりぬ		懸けぬ	時	に			0	
230	20	4383		大伴 足 人	津の国の海なぎざに 船装ひ 巻し出も 時に 母か目もかも		巻し出も	時	に		母か目もかも	0	
★	2	191	挽	大伴 朝 成	.. 春が遺麻蘇くは 虎崎の山 時の往ければ 宗師となりぬ		懸けぬ	時	に			0	



## 二、分 析

【一】「く時なし」について

全例を見渡してまず気付かれるのは「くの時もなし」のような類型表現が多いということである。その典型は、第31例その他に見られる「わが恋ふらくは止む時もなし」であると言えようが、また、第2例の「衣ならば脱く時もなくわが恋ふる君そ」や、第23例の「何時はしも恋ひぬ時とはあらねども」や、第34例の「玉櫛懸けぬ時なくわが思へる」や、第137例の「思ひ忘るる時も日も無し」なども、同様の慣用的表現であると言える。

それらの意味するところが、「中断する時期がない」ということなのか、それとも「終結する時期がない」ということなのかは判断できないが、いずれにしても、現代語の「常に」に対応する意味であるのは間違いない。

疑問なくこの類と認められるものが49例あるが、さらに、第41 46 86 90 146 209 222の7例も同類と解釈すべきであろうから、結局、この種の表現は56例(約25%)を数えることになる。それらに関して言い得る点を列挙しよう。

(1) 成句的なものであるから、その「時なし」という表現の中からさらに「時」だけを抽出して吟味することは困難であり、またおそらく無意味である。

(2) 56例中48例(86%)が恋愛歌あるいはそれに類する歌の中に見出される。

(3) 前項と関連するが、56例中34例(60%)は作者未詳であり、ほとんど、巻10 11 12 13などの作者未詳の巻々に集中して見出される。

(4) 第2 3 4 5例など、天智・天武・持統期に最初の局部的集中が見られるが、そもそもこの期の例歌が少いのであるから、この現象を意味づけることは困難である。

(5) 人麻呂作歌にはこの種の表現がない。人麻呂歌集歌(略体)に1例(第23例)がある。作者の明らかな用例の初出は第28例の日並皇子宮舎人等であるが、以後も、専門的歌人の作品には、きわめてまれにしかこの表現が見られない。すなわち、憶良には例がなく、大伴坂上郎女に3例、そして旅人、金村、虫麻呂、家持に各1例、という次第である。

(6) 万葉集中の「いとまなし」という表現とは、語構成の類似にもかかわらず、内容的交渉が認められないようである。

### 【二】「くの時」について

全例中78例(34%)はこの種の、修飾語を受けて副詞節を作る関係副詞的な「時」であるが、その従属節の「内側」の内容は広範多岐にわたっており、それらを分類してそこに何らかの特徴を抽出することは容易ではない。わずかに指摘できるのは次のような点であろう。

(1) 人麻呂作歌全9例中6例(66%、第7 8 10 11 12 13例)はこの種の「時(に)」であるが、その6例中5例までは過去を、残る1例(第9例)はいわば歴史的現在(すなわち過去性を負った現在)を示しており、要するに人麻呂が「くの時」<sup>1)</sup>として想起する「時」のすべては、過去に属するものであると言える。他方、人麻呂歌集歌ではこの種の「時に」は12例中3例あるが、いずれも過去には関係がない。

(2) 虫麻呂もこの種の表現の頻度が高い(12例中9例、75%)が、その「時」の内訳は、未来2、現在3、歴史的現在6、過去0という分布であって、この点から見る限り、その意識は必ずしも過去に向いてはいなかった、と考えるべきであろう。

(3) 家持の場合は、33例中13例(39%)にこの表現が見られるが、そのほとんどは現在、未来、あるいは不定時を示しており、過去にかかわるものは2例(第165 169例、ともに挽歌)にすぎない。

(4) 「もの思ふ時に」という表現は、第92例を除いては、文馬養、中臣宅守の歌にのみ集中してあらわれている。以上のような特徴には、そこに若干の偶然的要素が見込まれはするが、なお、各作者の時間意識の指標として理解することが許されるであろうと思う。

【三】「くの時ゆ」について

時ゆ・時よ・時より、のように時の起点およびその後の継続をあらわすものは、合計16例ある。その内訳は次の通り。

(1) 天地創造など神話的起源を指示するもの9例。すなわち、人麻呂作歌2例(第7 8例)、人麻呂歌集歌1例(第20例)、作者未詳歌3例(第35 101 102例)、憶良1例(第116例)、赤人1例(第134例)、家持1例(第186例)。

(2) 「久しき時ゆ」とするもの4例。すなわち、人麻呂作歌1例(第15例)、人麻呂歌集歌2例(第22 24例)、作者未詳歌1例(第33例)。その「久しき時」の内容は、いずれも、恋の相手をはじめ知って以来、あるいは相手に最後に会って以来の時間を「長い」として把握したものである。したがってそれは、個人の経験の範囲内にある「久しき時」である。

(3) 具体的時点をさすもの3例。すなわち、作者未詳歌1例(第81例)、虫麻呂歌集歌1例(第154例)、家持歌1例(第177例)。その時点はいずれも個人の経験の範囲内にある。

以上を要するに、「くの時ゆ」の内容は、神話的起点でなければ個人の経験の範囲内というわけで、世代を若干

さかのぼるような、中間的時点にかかわるものは皆無である。

【四】修飾されていない「時」について

修飾語を持たない、裸の「時」について考えるにあたって、まず触れておきたいのは「久しき時」および「移り行く時」の二表現のことである。これらはたしかに見かけの修飾語を備えているが、他の場合とはちがって、修飾語である用言の主語がほかならぬ被修飾語「時」であり、いわば「時久し」「時移り行く」の倒置であるから、この「時」は修飾語の存在にもかかわらず、ある意味では裸である。ただし、「久しき時」全5例中4例は「久しき時ゆ」という慣用的表現であり、これについてはすでに前項に一括したので、あらためては述べない。残る1例(第201例)のことは後に「時を過ぐ」という表現を考察する際にまとめてとりあげようと思う。「移り行く時」については、一応この項にふくめて考え、後に「移り行く」という表現を考察する際に再度吟味するつもりである。

さて、修飾語を冠されない、裸の「時」は全部で47例あるが、そのうち【一】で述べた慣用表現「時なし」の類を除外し、上述の「久しき時」5例を除外すると、残るのは、第6 14 18 21 39 40 43 45 50 59 82 87 95 99 100 105 109 120 141 143 145 162 163 164 170 171 181 182 187 190 193 195 197 203 204 212 224 227 例の38例である。これらの用例のほとんどは、「最も適する時期」「最も熟する時期」「盛りの時期」「時節」「その季節」「定められた、約束の時期」のような意味を持っている。個々の表現に色あいのちがいがあるのは当然だが、これらはおよそ同一の意味として一括し得る。そこでこれらもまた除外して考えると、残るのは第39 141 163 193 224の5例となる。以下この5例についてやや詳細に見てみたい。

(1) 第39例歌(一四—三三五二 東歌)

信濃なる須賀の荒野にほととぎす鳴く声聞けば時過ぎにけり

この「時」の内容は何であるか。諸説を通覧してみよう。

『代匠記』(精)：時ノ至ルト云意ナリ：霍公鳥ハ農ヲ催ホス鳥ナレバ、サル心ナドニテモカクハヨメル歟

『考』：旅に在てとく帰らんことを思ふに、ほととぎすの鳴まで猶在をうれへたるすがたも意も京人の任などにてよめりけん、又相聞の方にも取ば取てん

『古義』：春の末かぎりに逢むと、人に約り置しを、得逢ずして：契りし時はや過にけり、と云るなり

折口『総釈』：旅人の歌と見る外に、いま一つの観方がある。其方が、民謡的である。鳥と農事との関係を深く考へてゐた時代の人が、ほととぎすが啼くと行はねばならぬ田の為事を思ひ出したと見るのである。さうすれば、『時過ぎにけり』は、深い抒情的の驚きでなくなる。単に田行事の時が過ぎた、すぐ着手しようといふ位になつて了ふ。

窪田『評釈』：須賀の荒野に住んでゐる庶民の、渡鳥のほととぎすの声によつて、時の推移を感じた心である。山の雪の消え方、渡鳥などで、農耕の時期を知るのは、庶民には普通のことと、これもそれと思はれる。

武田『全註釈』：時節の過ぎたことを詠嘆している。この時は、京に帰るべき時期と解せられるが、なお季節の移つたことを嗟嘆したものとも見るべきである。：詠嘆の調子のよく出ている歌だが、これを有しているのは、東歌としては純粹でない。

土屋『私注』：信濃の地に行はれた民謡と見るべきである。従つてトキスギニケリも、会ふべき時が過ぎ、会ふ機会が失はれるであらうといふ、恋愛感を表現して居ると見るのが最も自然であらう。(農耕時期説、京人旅行説に對してはともに否定的。)

『古典大系』（大意）：ホトトギスの鳴く声を聞いた。ああ、もうずいぶん時が過ぎたのだなあ。

沢瀉『注釈』（口訳）：ほととぎすの鳴く声を聞くと時を過ぎてしまったことだナア。

（沢瀉氏はこの「時」が何であるかは断じていないが、訓釈の項に諸説を挙げたのち、大久保正氏の「東歌のほととぎす」の結論「私は東歌の中にたゞ一首しか姿をあらわしてゐない、見方によつてはまことに貴重とも思はれるほととぎすを、遺憾ながら本来の東歌の世界から追ひ出すことをもつて妥当とせざるを得ないのである」を穩当な説としている。）

以上を要するに、この「時」の解釈には、

(A) 京人の帰京の時期

(B) 逢う約束の時期

(C) 農耕の時期

(D) 時間の推移

の四説があり、論者によっては二説をあわせ提出している場合もあって、いずれとも結論の得がたい状況である。ただし大久保氏の論を尊重すればB・C両説の線は弱まり、残るAD両説（この二つは矛盾しないので共に成り立ち得るが）のうち、Dの「時間の推移」という抽象的時間意識の成立過程の究明がカギになることになる。

思いあわされるのは、第39例以下第44例までに並ぶ巻14の「時」の用例が、他の巻巻のそれに較べて独得の様相を呈している事実である。第39例および第42例の「時」は修飾語を持っていない。第40例の「木の暗の」、第41例の「うけらが花の」、第43例の「椎の小枝の」の3例は、たしかに文法上の修飾語であるが、その実、修辭色の濃いも

ので、「時」の意味を限定する力は希薄である。実質的な修飾語を持つものは結局、6例中第44例1例のみであり、巻14の「時」がこの意味で独立の傾向を持つことが指摘できるであろう。また、6例中3例までの「時」が主語として述語動詞をとる構文になっているのも特異なことである。万葉集全体から見てもやや特殊である、このような「時」の用例がなぜ巻14に集中しているのか、今のところ私には謎というほかはない。

ただ、今問題にしている第39例歌「ほととぎす鳴く声聞けば時すぎにけり」の「時」を、具体的な時点指示の「時」の概念から抽象的な時間の流れを意味する「時」の概念へと至る、過渡的な時間概念の表現であると仮定してみると、この仮定はかなりよく右の謎を説明するように思われる。なぜならば、固有の東歌の中から抽象的な時間概念が独自に発生してくることは考えにくいのに対して、「東歌としては純粹でない」（全註釈）、「本来の東歌の世界から追い出」（大久保説）されたほととぎすの、この第39例歌においてはそのような「時」の抽象化の蓋然性がある程度まで期待できると思われるからである。「時」を受ける動詞については後に述べるが、「時過ぎにけり」を、『代匠記』のように「時ノ至ルト云意」にとすることは「過ぐ」の語義から言って無理であり、折口説のように「田行事の時が過ぎた、すぐ着手しよう」と解することも恣意的にすぎよう。「田行事の時が来た、さあ始めよう」というのならわかるが、農民が大切な時期をはずして遅ればせに「すぐ着手しよう」と諧謔もなく歌うようなことがあり得るだろうか。ここはやはり、何らか予定されていた時点が過ぎ去ったことを嘆じているものと考えるのが自然だと思う。しかもその作者が土着の人でなく京に帰るべき人であってみれば、時点が過ぎた、という具体的認識が、時が流れた、という抽象的認識そして詠嘆へと転化するのもまた自然のことと思われるのである。<sup>(注1)</sup>

(2) 第141例歌（四―五七九 余明軍）

見奉りていまだ時だに更らねば年月のごと思ほゆる君

『古義』：俗に未時ミヅさへと云が如し…時は、四ノ時の時なり…時なりとも移ひなば、久しき事におもふも理なるに、

まだ時さへ更らぬに、はや年月を経し如く、久しく相見奉らぬ事とおもはるゝよとなり

武田『評釈』：一時刻だけでも

沢瀉『注釈』：次の句の年月に対して日時といふ、その最も短い「時」の意である。

距離としての時間（期間）の、きわめて短いものを言っている。

(3) 第164例歌（三―四六九 家持）

妹が見し屋前に花咲き時は経ぬわが泣く涙いまだ干なくに

この歌の「時」については別稿(注2)で詳しく述べたので、ここではその要点だけを記す。原文「花咲時経去」を「花咲く時は経ぬ」と読んで、花の時節も過ぎたと解する説もあるが、これはやはり「花咲き」と連用中止法に読むべきである。したがって、この「時」は、具体的には妹の死から現在までの期間を意味する。ところで「時は経ぬ」という表現は万葉集中この家持の一首にだけ見られるもので、それは天平期特有の、新しい時間意識を反映しているものと推察できる。この歌は憶良の「妹が見し棟の花は散りぬべしわが泣く涙いまだ干なくに」の焼き直しであり、人麻呂以来の亡妻悲傷の系譜に属するものではあるが、すでに亡妻悲傷の「当事性」を回避して自己を「観照者」の位置に置こうとする志向が認められ、一首の抒情の重点は「わが泣く涙いまだ干なくに」にあるよりはむしろ「時は経ぬ」の方に移動していると思われる。ここにおいて「時」は、表現上の一つの抽象化に到達したと考えるとよいのではなからうか。



## (4) 第193例歌(二〇—四四八三 家持)

移り行く時見る毎に心いたく昔の人し思ほゆるかも

「移りゆく」という修飾語の性格については上に述べた。「時見る」の表現に対して『新考』は「時ならば時ニアフなどいふべく見ならば物ミルなど云ふべし。又ミルならば此巻の書式によれば見流と書くべし。おそらくはもとき相とありしを後人のトキアフにては辞を成さずと思ひてさかしらに相を見に改めしならむ。げに後世の語法ならばトキアフとは云ふべからざれど本集には後世ならば省くべからざるニを省ける例多ければトキニアフをトキアフと云へりとすべし」と言っているが、諸本「見」について本文の異同はなく、従いがたい。

さて、この「時」であるが、諸注の多くはこれを、奈良麻呂の変に至る当時の「時世」「時勢」と解している。広い意味ではその通りであろうが、しかしそこには問題がなくもない。というのも、この歌のよまれた天平勝宝九歳すなわち天平宝字元年六月二十三日は事件発覚の直前であり、その五日後には山背王が「橘奈良麻呂備兵器謀<sub>レ</sub>田村宮正四位下大伴宿禰古麻呂亦知其情」(続日本紀)と上告しているような微妙な時期である。三形王のことはつまびらかでないが、その宴席で家持が、時勢を諷し、あるいはやがての事件を念頭に置きもしたような歌を公表することは考えにくいのではあるまいか。『拾穂抄』は「彼人々其七月に或は死罪或は流罪におこなはれたり、心うかりし事ありき、たとひ家持卿は其事にあづからずとも朋友一族此さはぎあるべき折にいかで其心いたましからざらん、さしも忠節の先祖の名も口おしく侍けん(中略)其心をうつりゆく時見ること心いたく昔の人しおもほゆるとよみ侍しにや」と説明しているが、六月二十三日にはそれはまだ「心うかりし事ありき」という過去のことになりきってはいなかったはずである。この意味では『代匠記』の「昔ノ人ハ指トコロ有ヘシ」(精撰本)「これは三

形王の父のおほきみ、たれとはしられねと、家持の得意にてかくはよまれたるなるへし」(初稿本)という推測の方がいくぶん実情に近いかと思われる。私は、この歌における家持の感懐を、翌宝字二年二月の中臣清麻呂邸での宴席歌、

高円の野の上の宮は荒れにけり立たしし君の御代遠そけば(二〇—四五〇六)

の感懐にそのままつながらる性格のものとして受けとるべきだと考える。この宴に歌を記したのは主人清麻呂・市原王・甘南備伊香・大原今城・三形王(御方王)と家持であり、このころの家持の交友関係は「こういう共に先帝の思い出を懐しむことのできる」(政界の主流からはずれた王族や旧王族たちの中にあつた<sup>(注3)</sup>)のである。「時勢」は、家持自身の嘆老の感懐をもふくめ、広い意味で理解しなければならぬであろう。

(5) 第224例(六一—〇五六 福麻呂歌集)

をとめ等が續麻懸くとふ鹿背の山時の往ければ京師となりぬ

武田『全註釈』：時が行ったので。時が運行して、その時節に廻り合って、かような山間の僻地が、時勢に合って都となったことを感嘆している。

土屋『私注』：時が来れば都となつた。時が経て行くのは一方から見れば、其の時が来るのである。

窪田『評釈』：時の動きを、時の方を主として云つたもので、時節が移つて来たので。：僻地が京となることは古くは屢々あつたことなので類歌があり、陥るところは皇威を讃へることになるのである。

沢瀉『注釈』：時の推移に深い感慨をよせている。時が来たので。

類歌としては、たとえば宇合の「昔こそ難波田舎と言はれけめ今は京引き都びにけり」(三一—三二二)などが挙げら

れよう。抽象的に把握された時間の経過が皇威の讚美につながるところに注目される。

【五】「時」の述語について

「時」が述語動詞ないしそれに準じるものの主語になっている場合のその述語について観察する。

(1) あり

左に例歌番号を列記する。「時にあらず」「時ならず」もふくむは、文法的には主述の関係にないが、便宜上(口)を付してあわせ記した。

第(6) (14) (38) 55 57 125 128 135 136 (142) (143) 145 163 170 188 194 227

これらの「時あり」については二つの共通点が見出される。第一は、その「時」が「場合」の意味であること(ただし第227例のみは「時節」)。第二は、その歌が逆接・戻続的文派を持つこと、である。17例中11例は「を」「ど」「ども」などの逆接接続助詞によって「あり」が否定される構文になっているが、その種のねじれが比較的希薄に見える第136例や第194例も、常識や通念に対する例外を提示するという曲折をふくんでいる。

なお、「時あらず」の類の多くは【一】に述べた「時なし」と同様の発想の慣用句と考えられ、坂上郎女の第128例歌と家持の第163 170 188例歌に見られる「時しはあらむを」の類も個人的常套句の色あいが濃い。

(2) 過ぐ

第18 39 43 111 113 (201) 204例歌にあらわれる。第201例歌の場合は「時を過ぐ」であるが、便宜上ここにふくめた。これらの例のうちで「時」を長さ(期間)としてとらえている(可能性の強い)ものは第39 201 204の3例である。

(3) なる(成る)

「時はなる」という、明らかな主述関係を示す例は、第109 120 162の3例だけであって、他の第50 107 110 126 180の5例は「時になる」の形である。しかし「時になる」の主語は何であるかと考えれば、それは（文面にはあらわれないが）やはりまた何らか（「時」）のようなものであるはずであるから、両者を一応ここに一括しておく。この項の「時」は当然、期間ではなく時点である。

(4) 来<sup>く</sup>

第2144 173例の3例がある。「時」は、約束の時刻、予定の時節、など待たれた時点の内容としている。

(5) 来向<sup>ふ</sup>

第9例に見える。この例については別稿で考察を試みたが、以下にその大意を再録したい。いったい、今こそ「来向<sup>(注4)</sup>ふ」と歌われる「御猟立たしし時」とはどのような「時」であろうか。それは、たとえば、「草壁皇子が、馬を並べて御狩にお出かけになった時刻」（日本古典文学大系）、「日並の皇子の尊が馬を並べて狩りに出られた同じその時刻」（日本古典文学全集）のように現代語にうつされているが、今たちもどって来るその「時」は、いったいどの程度に、ほかならぬ「草壁皇子の時間」であり得るのか。くだいて言えば、その時、(A)草壁皇子は馬を並べて（もういちど）狩にお出かけになるのか、それとも、(B)かって草壁皇子が狩に出られたのは（たとえば）X時という時刻であったが、まもなくそれと同じ時刻のX時が来るぞ、というようなことであるのか。(A)ならば、いわゆる幻視が、(B)ならば時間の回帰が問題になるであろう。しかし実のところ人麻呂にとって草壁皇子の死は、やはり一回的なもの、非回復性のものでして受けとめられていたであろう。この歌に幻視を見るにせよ回帰の思想を見るにせよ、そこには人麻呂の、確信よりはむしろ願望ないし鼓舞の性格が認められるのではあるまいか。

(6) 往く

第224例。この歌についてはすでに【四】の(5)で触れた。「時が経て行くのは一方から見れば、其の時が来るのである」(私注)、「時の動きを、時の方を主として云つたもの」(評釈)という説明はもっともであるが、それが当時の時間意識に沿うものであるかどうか、私には判断ができない。

(7) 経よ

第164例。上述の通り「時は経(ぬ)」という表現は、万葉集中家持のこの歌にだけ見られるものである。動詞「経」の用例は集中に約90を数えるが、そのほとんど(90%以上)は「年」「月」「幾世」など長い期間を意味する語を主語とする。すなわち「経」は本来、長い時間の経過を受けとめることばで、年、月、また世が経るというのは、その循環の長いひとめぐりを単位とする時間が経過することを指したものと推定される。家持が「経」の本来の主語「年・月」の代りに「時」をその主語として定立したことの一つの意味は、「時」に長い時間的距離感を与えたことにあると言えるであろう。(注5)

(8) 経ゆく

第205例。黄葉の「うつろふ」ことと、時の「経行く」こととが詩的等価をなして並置されている。この「時」は約束の時点の意味であるが、それが過ぎて行くことが「散る」「色あせる」印象をともなう点に注意される。

(9) 移ゆる

第40例。次項にまとめて考察する。

(10) 移りゆく

第193例。前項の「移る」もふくめて考えるが、万葉集中の「うつる」「ゆつる」の用例は、三―四五九（縣犬養人上）、四―六二三（池辺王宴誦歌）、八―一五一六（山部王）、十一―二六七〇、同―二六七三、十四―三三五五、二十一―四四八三（家持）、の7例があるのみである。「移る」の主語は、今問題の「時」2例以外には、（空の）月3例、黄葉1例、黄葉にたとえた君（の生命）1例である。作者名の明らかなものについて言えば、伝未詳の山部王を除き、いずれも作者は天平期の人物である。

「移る」の再活用動詞「うつろふ」が、語彙「時」の述語になっている例はないが、念のため「うつろふ」の全用例中、作者の明らかなものの分布を見れば、憶良1例、大伴坂上郎女1例、大伴坂上大嬢1例、大伴家持12例、石上宅嗣1例であって、この場合の作者もまた万葉後期に集中しているのが特徴である。

(11) 更かはる

第141例。「かはる」（易・更・変・撰・替）が明確に時間にかかわる例としては、この歌以外に、二―一八〇、十一―二七九二、十三―三三三一、同―三三二九、十八―四一二五、十九―四一五四、同―四一五六、が挙げられるが、その主語（被修飾語の場合もふくむ）はすべて、「年」「年月」「月」「月日」のうちのいずれかである。「…この九月の 過ぎまくを いたも為方すべなみ あらたまの 月のかはれば 為む為方の たどきを知らに」（十三―三三二九）、「あらたまの 年ゆき更り 春されば」（十九―四一五六）の例に顕著なように、それらは時間の循環の一サイクルが終って次のサイクルに入ることであらわしていると言えるだろう。余明軍の第141例歌において「時」が「更る」の主語として導入され、その「時」が「年月」に対照されている点に注目される。

【六】「時を」「時に」に連なる述語について

前項では「時」が主語の位置にあるものについて観察したが、本項では「時を待つ」「時に遇ふ」のように形式上「時」が目的語の位置にあるものを取りあげる。ただし「時にあり」「時を過ぐ」「時になる」の三表現については、便宜上すでに【五】で述べたので繰り返さない。

(1) 時(を)候ふもちまほ

第103例、七夕歌である。『時代別国語大辞典上代編』はこの種の「さもらふ」を説明して、「時の至るのを待つ」。

風浪の和ぎ静まるのをうかがい待つ場合に用いることが多い。」と述べ、例としてこの歌のほかにも、六一九四五、七  
 一一七一、十一—二六〇六の歌、および「託称候風カゼシモラフトイフニツケテ、淹留数月ウツルキ」(雄略紀七年)、「海表之国、候海水サモラヒテ以来賓」(宣化紀元年)の文を挙げている。この歌では、天の河の風浪が意識されているであろう。

(2) 時(を)待つ

第59 82 99 100 178 197 203 213例。ただし最後の第213例「帰り来む時の迎へを何時とか待たむ」には(A)∴の時を迎えるのを、(B)∴の時にあなたをお迎えするのを、(C)∴の時にあなたから来る迎へを、の三解があるが、いま(A)解によってここにふくめた。万葉集にあらわれる「待つ」の意味や機能については別稿でやや詳細に考察した。(注6)集中272例ある「待つ」の用例の七割強は、恋人ないし親しい人を「待つ」ものであるが、それ以外に、待つことの対象になっている主なものは、「(空の)月」34例、「船」24例、「秋(および秋萩)」21例、「猪鹿」5例、「霍公鳥」5例、などである。また、「時(を)待つ」の「時」は、いずれも「∴の熟する時」「∴の時節」「予定の時」などの時点を意味している。これらの「待つ」が千年、万年、あるいは「とこしへに」などの語彙とはほとんど交渉を持たない点にも注目されよう。

(3) 時・片待つ

第104例。ひたすら待つ、の意。前項の説明に準じる。

(4) 時片設く

第88例。『時代別国語大辞典』に「時が近づく。時間をあらわす語に続けて用いられる。その時間をマク（待ち受ける）意から転じたものか。」と説明されている。ところで、同じ「片設く」を用いた歌に、

藪ころもを春冬片設けて幸しし宇陀の大野は思ほえむかも（二一一九一、日並皇子宮舎人等）

があつて、「春冬」をどう読むかに問題がある。沢瀉『注釈』は、武田『全註釈』が二字を合わせてトキと訓み、実際春季および冬季に宇陀の野に出遊せられた御事蹟を想起しての「時節」の意に解したのを敷衍して、「必ずしも皇子の御事蹟に即しなくても（中略）春冬の文字を狩猟の行はれる時節としてトキと訓ませたと見る事が出来よう。時とすれば初句の枕詞との接続も『解き』とかけ言葉が極めて自然である。」として、春冬トキ説を支持している。特に枕詞との関係において、示唆多い説であると思う。そこでもしこの「春冬」をトキと訓じるとすれば、「時片設く」の用例は集中2例ということになるわけである。

では、この「片設く」という動詞の性格はどのようなものであろうか。ふたたび『注釈』の説明を左に借用する。

…攷證に「方儲カタマケにて、皆その時を待まうけたる意也」とあるのがうなづかれるやうではあるが（中略）殊に「夕かたまけて恋はすべなし」（桑川注、十一―二三七三）の如きはそれ（桑川注、他動詞としての解釈）では不都合である。人が夕を待つのでなくて、夕が近づくのである。そこで井上氏新考には右の「冬かたまけて」（桑川注、十―二二三三）の例を引いて「自動詞なり」として補訂本には「語意は近づきてといふ事ならむ」とし、講義（桑



川注、山田孝雄『万葉集講義』にも「春秋冬夕などを人が、待ち設くる意にはあらず、それらの時自身が用意する意にて近づかむとしてそのしるしの見え初めなどするを『かたまけ』といへるなるべし」とある。ともかく「近づいて」といふ意とすれば右にあげたどの例の場合でもあてはまる事は認められる。

たしかに「夕かたまけて恋はすべなし」の場合は自動詞としてしか理解できない。しかし「磯の間ゆ激つ山川絶えずあらばまたもあひ見む秋かたまけて」(十五―三六一九)の場合は逆に「待ちうけて」の意の他動詞として理解する方が自然ではあるまいか。『注釈』が「ともかく」として断定を避けているように、動詞「かたまけ」には自他両用の用法があったと考えるべきであろうし、そのような両面性はこの複合語彙の発展過程における異なった段階をそれぞれ反映していると見てよいであろう。その発展過程に関してはさきに引いた時代別国語大辞典のほか、日本古典文学大系本万葉集の三六一九番歌の頭注、

カタマケのカタは、時・方向などを漠然と指す。マケはマウケの約。起源的にはマは間、ウケは受け、mauke  
 ↓makeであろう。然るべき間を受ける意から、あらかじめ用意する、待ち受ける意となり、カタマケと熟合して、  
 時を待つ意となり、時が移って或る時期に達する意となった。

がある。(ただし同頭注はこの歌の場合を自動詞的に解して「時が移って秋になって」と説明している。)

ところで、動詞「かたまけ」の主語ないし対象語となっているものは、今問題にしている第88例歌(十一―一八五四)および二―一九一(春冬)を除外すると、「秋」(十五―三六一九)、「春」(五―八三八)、「冬」(十一―二一三三)、「夕」(十一―二六三、十一―二三七三)の四種にしばらくは限られる。すなわちそれは循環する自然の運行の一区分である。除外した一九一(春冬)も字面を尊重すればこの類に入る。『梅のうつろへば桜の花の時片設けぬ』として季節の

推移を歌うこの第88例歌が「片設く」という動詞を用いているのは、「かたまく」のこの性格を正確に踏んでいるものと言えるであろう。

(5) 時に遇ふ 第199例

(6) 時に近づく 第222例

(7) 時近み 第168例

(8) 時を未だしみ 第185例

(9) 時と見る 第191例

(10) 時見る 第193例

(11) 時の盛りを過ぐしやる 第115例

(12) 時わずか 第96例 【一】の類か。

(13) 時終へず 第86例 【一】の類か。

(14) 時もかはさず 第209例 【一】の類か。

(15) 時の盛りを留みかね 第115例

右の(5)から(15)までの用例についても注意すべき問題は多いと思う。とりわけ、発話主体の立場(自己意識)と「時」の認識との関係に興味が抱かれるのであるが、それらは私としてなお分析不十分の部分なので、本稿は一応以上で閉じることにする。なお本稿では語彙「ときじ」について触れる余裕のなかったことも付記しておく。

(注)

1 本稿の執筆時、大久保正氏の「東歌のほととぎす再考」(論文集『万葉の発想』桜楓社・所収)という貴重な論文をうかつにも見落していた。いま、校正の段階でこの注を加えている。さいわい、私のここでの考察に改変の要はなかったが、大久保氏ならびに関係諸氏への非礼をお詫びしたい。

2 「時は経ぬ」考 『論集上代文学』第七冊 一九七七年。

3 小野寛氏「大伴家持の生涯」 『萬葉集講座』第六卷 一九七二年(有精堂)による。

4 「試論・人麻呂の時間」 『論集上代文学』第四冊 56ページ 一九七三年。

5 注2と同じ論文による。

6 「万葉集の『待つ』」 『古典と現代』43号 一九七六年。